初めて、かけがいのない友人の訃報に接して

今日昼過ぎ、退職まで３年を残して現職での友人の訃報の知らせがあり、唯々驚き、残念でならない。
数年前に病を患い、術後間もなく「元気になったよ！」と本人からメールがあったので、安堵していたのだが……。

自分にとって今あるのは、彼のお陰といっても過言でない。
彼は重症児の療育の共同研究の研究費取得の研究申請書作り、研究会計報告書作り、研究報告書編集・作成、研究打ち合わせ会場設定、等々、いつも共同研究の煩わしい事務的仕事を引き受けてくれた。
お陰で我々は何ら煩わしい事務的仕事はせずに、３年単位の共同研究そのものの研究自体に継続的に専念して取り組むことができた。
改めて文献を当たってみると、１９８１～２００１までに８本余りの報告書編集・作成を手がけてくれていた。

また、１９９０から８年余り、厚労省地方局の療育担当官併任時代も同じ併任官としてお世話になった。
年一回の担当官会議で夜遅くまで語り合うのが楽しみであった。

更に、自分のリタイヤ後も障害者自立支援法関係で解らないことがあれば彼にメールすると、間髪を入れずに返信をいただいていただけに、今は、正に片腕が削がれた感じ……。

現職時代の半分以上の期間を、重症児の療育の探求を彼と共に歩んだ感があるだけに、また、自分は旧国療の初期の指導員なので先に逝くのは年輩の自分と思っていただけに、後輩である彼の訃報はやはり残念……。
今ある自分に多大な影響を与えてくれたかけがえのない友人の訃報は彼が初めてだけに、我が身の一部がなくなっていくようで、悲しいというより何とも寂しい限り……。
かけがえのない友人の訃報に接した折は「友人の分まで……」と云えばいいのだろうが、実際に体験するとそんな気は当分起きそうにない……。
今は、ただ彼の冥福を祈り、その内あの世で再会し、また語り明かすのを楽しみにするしかなさそう……。

追伸：早速、研究仲間の後輩が彼宅を訪れてくれたようで、「とてもいいお顔でおやすみになられていました。今にも、『何やってるんだ』と起きてきそうで・・・」と、夜半にメール。
この後輩のお陰で彼と最後に会えたような気がする。
また、彼の仕事への意志の強さが後輩に着実に伝わってるようで、彼も満足していることと思う、合掌。

阿部幸泰　　（2008 年 8 月 17 日　記）